



■ 巻頭言

熊本学園大学外国語学部教授 外国語学部長 野田耕司（中国語学）



2024年、東アジア学科は創設30周年を迎えました。1994年当時と比べ、日本と東アジアの人的・文化的往来は明らかに頻繁になりました。「中国語・韓国語を学んでアジアへ羽ばたこう」というような月並みなキャッチコピーではなかなか高校生を振り向かせることが出来なかった時代を知っている私のような者からすれば、隔世の感があります。韓

国のエンターテインメントを中心とする文化への親しみ、韓国・中国・香港・台湾からの訪日客の増加、そしてTSMCの誘致と、東アジアとの接点がなかなか見出せなかった熊本においても東アジアが身近に感じられる環境となりました。熊本に居ながらにして、韓国語や中国語をビジネスのみならず生活でも使う機会が増えています。これからも、このような接点を活かしながら東アジア学科は熊本の地で発展を続けて参ります。

□ 研究紹介——朝鮮総督府農業技師の足跡

東アジア学科教授 土井 浩嗣（朝鮮史）

植民地期の朝鮮では、朝鮮総督府を中心に産米増殖計画や農村振興運動などさまざまな農業政策が実施された。これらの農業政策の研究では、朝鮮総督府や地方の道など行政機関が残した記録資料だけでなく、植民地農政にたずさわった個人に焦点を当てることで、農政の実像により接近することも大切である。ここでは、九州とゆかりのある農業技師である八尋生男（やひろいくお）の足跡について簡単に紹介することにしよう。

彼が朝鮮農政の表舞台に登場するのは、1930年代の農村振興運動の時期である。八尋は、農家更生計画の解説や農本主義者の山崎延吉の招聘など、運動の実施に当たって非常に大きな役割を果たした。

八尋生男は、1881年（明治14）に福岡県筑紫郡御笠村（現在の筑紫野市）で父・幾平と母・ときの間にも生まれた。1907年に東京帝国大学農科大学農学科を卒業後、ただちに熊本県農会技師となり、1910年には熊本県農務課長となった。そして、11年、朝鮮総督府技師（農商工部殖産局農務課勤務）に任命され朝鮮に渡る。ちなみに、郷里の御笠村の出身者には、保護国期に釜山に渡り、朝鮮の「水産王」と呼ばれた香椎源太郎がいる。もしかしたら彼の人生になんらかの影響を与えていたかもしれない。

朝鮮での経歴を見ると、1911～17年に農商工部勤

務の技師、17～22年には全羅北道で農務課長、全州農業学校長などを務め、22年8月から約1年間、アメリカ・イギリス・デンマークなど各国へ農業視察に赴いている。帰国後、23～31年に京畿道で農務課長を務め、ここでの農村指導が注目を集め、農村振興運動へとつながり、32年以降、総督府嘱託として運動に深く関与していくことになる。なお、彼は敗戦まで総督府で勤務しており、植民地期のほぼ全期間にわたって朝鮮農政に関わりつづけた極めて稀な人物でもある。

ところで、八尋は、渡鮮から約1年後に論説「朝鮮に於ける営農」を著している。その中で彼は「朝鮮には朝鮮流の農業上の天則が存在してある……故に此天則に従って営農せざれば遂に其地の農業にあらず……朝鮮流の農術則在来農術は其祖先以来幾多の星霜を経過する間に育成せられたのである」と述べ、朝鮮の風土や在来農法を重視する姿勢を見せており、その後も雑誌『朝鮮農會報』で朝鮮農書の『農事直説』や『農家集成』を取り上げている。朝鮮の在来農法重視や欧米各国への農業視察などが、どのように消化されて農村振興運動に結びついていったのか、植民地農政を考察する上で彼は重要な論点を提供してくれている。

敗戦後、八尋は故郷である福岡県御笠村に引き揚

げ、地元の史跡調査に没頭し 1955 年（昭和 30）に『御笠村小史』を出版している。1961 年には友邦協

会で農政を回顧する連続講演を行っていることから、この頃までは存命であったと思われる。

■ 「出張日記」

東アジア学科特任准教授 金 美連（比較教育学）

2024 年 12 月、韓国で戒厳令が出された二日後、日本の大学（母校）と韓国の大学との交流のため、韓国を訪れた。直前の出来事で急に取りやめることもできず、日本からの参加者たちは一抹の不安を覚えながらも韓国に向かう飛行機に乗った。空港で出迎えた韓国の主催者側も、戒厳令が無事に終わったことを笑顔で強調しながらも、いつもとは違った緊張感を漂わせていた。

前回、戒厳令が出されたのは軍事政権下の 1980 年である。その時は市民数百人が犠牲となった（いわゆる「光州事件」）。その後も 10 年近く軍事政権による

統治が続いたが、同事件を境にますます情報統制が厳しくなった。昨年、ノーベル文学賞を受賞したハン・ガン氏も、この事件について人の闇に触れつつ、体制を批判する本を書いている。

今回の交流で訪れた忠清南道の公立学校の図書館（3カ所）には、理由は定かではないが、女史の作品は置かれていなかった。光州事件については、政府は認めてはいるものの、今もなお韓国社会の深い「分断」を日本に住む者として、垣間見たように感じた。

□ 東アジアへのまなざし

韓国政治が荒れている。大統領が突如として戒厳令を発令したのに対し、議会が何とかこれを阻止することができたものの、今度は大統領の弾劾やら逮捕やらをめぐって攻防が続き、さらにはそれぞれを支持する市民が街に繰り出し、しばらく混乱は収まりそうにない。

戒厳令というのは内乱や暴動、大災害など国家が非常事態に陥ったときに治安維持などを目的として発令されるものである。幸いなことに戦後の日本でこの手段がとられたことはなく、日本人にはあまり馴染みがないが、私のような台湾研究者にとってこの単語は、真っ先にかつての台湾の状況を連想させ

東アジア学科准教授 田上智宜（台湾地域研究）

るものである。台湾では 1949 年から 87 年まで、何と 38 年間も戒厳令が敷かれ続けていたという歴史があり、これは世界最長記録なのだという。ただそれも今は昔、現在の台湾は民主主義体制が定着して久しく、その時代の話も今どきの若者にはピンとこないようだ。

政治のニュースは大抵聞いていて楽しいものではない。台湾に関する日本の報道を見ると、台湾有事が起こるのではないかという話題が最近ますます増えている。韓国も台湾も、自由で平和な時代がこれからはずっと続いていくことを願うのみである。

■ 幾米『星空 The Starry Starry Night』、2009 年、大塊文化出版

東アジア学科教授 小笠原淳（中国現代文学）

「Ilha Formosa（イラー・フォルモサ）」。麗しの島、美麗島。大航海時代、ポルトガル人船員が台湾島を通る際に、思わずそう叫んだという。あまりに有名なエピソードだが、それから 5 世紀の年月が流れた（台湾にとっても実に厳しい時代だった）今日、グローバル化が進み、世間は IT バブルに湧いている。今度は台湾島の世界最大のファウンドリが、東シナ海の端に「シリコンアイランド」を発見し、「九州のお隣」熊本は菊陽町に、東アジアの拠点の一つとなる工場を建設した。さらに、生成 AI の登場によって、半導体市場の過熱が増している。先日、AI にイラストを生成してもらった。その手にかかれば（もちろん手はないわけだが）、あっという間にそれっぽいイラストが出来上がるのだ。学生のレポートだって「お手」の物だ。なんとという文明の利器だろう。稀代の文筆家、司馬遷が見たら腰を抜かすに違いない。

紹介する幾米（ジミー、1958-）は台湾の絵本作家。『森林裡的秘密』（森林のなかの秘密、1998）でデビューし、数々のヒット作がある。陳腐な言い方になるが、幾米の描く世界は生成 AI の絵と違い、人間の悲しみが吹き込まれている。

天馬空に行く自由なイメージ、奇想天外な発想と鮮やかな原色の世界。そのなかに描かれる人間の小さな生活。大胆な構図のなかに、ポツンとたたずむ主人公たち。心の奥底に潜ませている悲しみや孤独が伝わってくる。両親の不和、祖父の死、いじめ、孤独、新しい友人との出会い。

深夜、寝台にすわって窓の外を星空を眺めている少女は、隣に引っ越してきた男の子に出会う。恋をし、そして、別れが訪れるのだ。



発行者 熊本学園大学外国語学部東アジア学科

編集人 小笠原 淳（東アジア学科長）〒860 - 8680 熊本市中央区大江 2-5-1 Tel 096-364-5161（代）